越境者作家としてのヘンリー・ジェームズ
— 『ある婦人の肖像』の研究— (大会講演 2007. 10)

Henry James: A Transnational Novelist
—A Study of *The Portrait of a Lady*—

秋山 正幸
AKIYAMA Masayuki

Abstract: Isabel Archer becomes a wealthy young woman when she inherits a huge fortune left to her by her uncle Daniel Touchett. Her cousin Ralph hopes she will be able to use the money to lead a free and independent life in Europe. Unfortunately, her newly-acquired wealth makes her the prey of the fortune hunter Osmond. She realizes that he loves her money, not her only after she has married him. In chapter 42, she understands that her innocence and naivety have made her the victim of the scheming Osmond and his sinister friend, Madame Merle. Towards the end of the book, Isabel, against the wishes of Osmond, visits Ralph on his deathbed, after which she returns to Rome. Many critics have concluded that Isabel is returning to Rome to reconcile herself to her husband. But I think that eventually she will divorce him in an effort to regain her freedom of spirit and independence to inquire into European cultural values. Clearly, Isabel's disastrous marriage is a fictional stand-in for the allure as well as the entrapments Americans of that time encountered in their dealings with sophisticated but morally impoverished Europeans.

Keywords: Henry James, A Transnational Novelist, *The Portrait of a Lady*, America and Europe, innocence and experience, the clash of cultures
ヘンリー・ジェームズ、越境の小説家、『ある婦人の肖像』、アメリカとヨーロッパ、無垢と経験、文化の衝突

ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) の創作活動は三つの時期に分けることができます。第1期に、彼は『アメリカ人』(*The American*, 1877) や『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881) など、国際状況を主題とした作品を書いています。

第2期の代表作は、アメリカにおける女権拡張運動を主題とした『ボストンの人々』(*The Bostonians*, 1886)と、イギリスにおける社交生活や政治活動を主題とした『カサマシマ公爵夫人』(*The Princess Casamassima*, 1886)などです。第3期には、彼は三大傑作と言われている『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902)、『使者たち』(*The Ambassadors*, 1903)や『黄金の盃』(*The Golden Bowl*, 1904)を書いています。三つの作品とも国際小説であります。

比較文学では、祖国を離れた「越境者」の文学が研究されるようになってきました。アメリカで生れ、主としてヨーロッパで生活し、晩年にイギリスに帰化したジェイムズは、まさに越境者の作家と言えるであらうでしょう。最近、国境を越えた作家たち(transnational novelists)の作品群をディアスポラ文学と呼んでいます。

ディアスポラ(Diaspora)のことについて、ランダムハウス英和大辞典には「バビロン捕囚後、ユダヤ人がパレスチナ以外の地へ離散したこと」とか「(パレスチナ、イスラエル外の)他国に住むユダヤ人たち」とか「(祖国を離れ四散した)移住者集団」という解説が書かれています。現在では、上記の最後に説明されているように、拡大解釈して、「移住者集団」、つまり、他国に移住する越境者たちをディアスポラと呼ぶようになりました。

アメリカのイリノイ州立大学で『汎日本——日本人ディアスポラの国際ジャーナル』という学術誌が発行されています。2007年の第5号には、「移住労働者に対する明治日本政府の教育指導——公文書の研究」と「記憶、歴史、コミュニティの場所——バンクーバー日本語学校におけるアイデンティティの研究」と題する論文が掲載されています。これらの論文の内容については今回は触れませんが、この題名が示すように、現在、ディアスポラの研究が盛んに行われています。

さて、越境者作家ヘンリー・ジェイムズの『ある婦人の肖像』について考察したいと思います。

ジェイムズはこの小説の序文で「自分の運命に敢然と立ち向かってゆく若い女性を描こうという着想が『ある婦人の肖像』とう大きな建築物を建てるに際しての私の出発点だった」(12)と述べています。この若い女性がこの小説の女主人公イザベル・アーチャーであります。

当時のアメリカ人の間ではヨーロッパ憧憬熱がありました。アメリカ人は自国に欠けているヨーロッパの伝統文化に憧れの気持ちを抱いていたのであります。イザベルもそのひとりでした。彼女は伯母のタチェット夫人に誘われて、ニューヨーク州のオルバニーからヨーロッパにやってきました。

ジェイムズは『ホーソー論』(*Hawthorne*, 1879)の中で「小説家が豊かな連想をまとめあげるには、歴史や慣習の非常な蓄積、風習や流儀の非常な複雑さが必要である」(34)と述べています。イザベルも同じように、歴史と伝統あるヨーロッパ文化に憧れの気持ちを抱いていたのだと思われます。

イザベルはロンドンから 40 マイルほど離れたガーデンコートと呼ばれるダニエル・タレット氏の屋敷に滞在し、その家の息子ラルフに親しみを感じるようになります。

ラルフは前途有望な青年でしたが、病気にかかり、療養生活を送っていました。彼はイザベルに会った時に、彼女こそ自分の身代わりになって生きていくことのできる女性であると思いました。なぜなら、彼女は旺盛な知識欲と自由と独立の精神を持った頼もしい女性であると思ったからであります。それ故に、ラルフは自分の夢をイザベルに託そうとして、勇を鼓して父に次のように頼み込むのであります。

「私はいとこに非常に興味を持っています。でも、あなたが望んでいるのとは違う興味です。私はこれから長くは生きられないでしょう。でも、彼女がどのような人生を歩んでいくのかこの眼で見られるまで生き延びたいと思っています。(中略)私は彼女の帆に少し風を送ってやりたいのです。(中略)彼女が望んでいることができるように彼女の力になってやりたいのです。たとえば、彼女は世界を自分の眼で見たがっています。私は彼女の財布にお金を入れてあげたいのです」(I:260)

ラルフは親の遺産の相続分の半分をイザベルに分与してやりたいと思ったのです。イザベルがそのお金を用いて、みずからの自由と独立の精神を持って、ヨーロッパで縦横無尽に活躍してほしいと熱望したのであります。しかし、皮肉にも、ラルフが彼女に分与した財産は、彼女から自由と独立の精神を奪う結果になってしまいました。

イザベルは3人の求婚者の中から、よりによって彼女の財産を目当てにしているギルバート・オズモンドを結婚相手に選んでしまったのです。どうして、そういうことになってしまったのでしょうか。

第1の求婚者は急進的な考えを持った、洗練された貴族ウォーバートン卿でありました。彼は富と権力を持った頭脳明晰な青年貴族であります。なぜ、イザベルは彼の求婚を断ってしまったのでしょうか。彼女は彼と結婚すれば貴族社会の中に埋没してしまい、自由にヨーロッパを探求することができなくなってしまうと思ったからであります。

第2の求婚者はキャスパー・グッドウッドでした。彼はハーヴァード大学の出身で、マサチューセッツ州で名の知れた紡績工場の所有者の息子で、在学中はボート部に属していたスポーツマンであります。工場では管理者の仕事に従事しています。イザベルは活力のある強引な彼に自分の自由を奪われてしまうのではないかという恐れを抱いたのです。つまり、彼女はこのような筋骨たくましい男性に支配されることを嫌って、彼の求婚に拒否反応を示したと言えましょう。

ではどうしてオズモンドと結婚することになったのでしょうか。イザベルはマダム・マールが仕組んだ財産目当ての計略に引っ掛かって、オズモンドと結婚する羽目に陥ってしまったのです。

計略を仕組んだマダム・マールはどのような女性なのでしょう。ジェイムズはマダム・マールとイザベルの会話の中でそのマダム・マールの本質を暗示しています。次はマダム・マールの言葉です。

「私はどちらかという頑丈なほうだと思っています。でも、ほんとうのことを言ってしまうと、私にはひどく欠けたところや割れ目があります。まだまだ結構役に立ちます。それはうまく直してあるからです。そして私はできるだけ戸棚の中にいるつもりです。(中略)しかし、外に出てきて、強い光線に照らされなければならなくなると、その時はひどい姿です」(I:275)

マダム・マールに憧れているイザベルは、この言葉の中にマダム・マールの陰湿な本性が隠されていることに気が付かなかったのであります。イザベルがマダム・マールに全幅の信頼を寄せていることが分かった後で、マダム・マールはイタリアの紳士オズモンドをイザベルに紹介します。

ちょうどその頃、タレット氏が死亡します。マダム・マールはイザベルが約7万ポンドの遺産を相続したという知らせをタレット夫人から聞きだします。この知らせを聞いて、マダム・マールはオズモンドをイザベルと結婚させるように企むのであります。

イザベルはオズモンドに会い、彼の高貴な容貌や人生観に惹きつけられてしまいました。ジェイムズはオズモンドのことを「彼は俗世間のわずらわしさに我慢できなくなり、ひとりで芸術と美と歴史について考えながら、選別され、精査され、整えられた自分自身の世界の中で生活するようになった」(I:377)と述べています。ジェイムズはここでオズモンドの内面世界を見事に描写していると言えましょう。オズモンドはイザベルに「人は自分の一生を芸術作品にすべきだ」(II:15)と述べて芸術愛好家としての自分の生き方を強調します。そして、彼は「因襲などではない。私は因襲そのものだ」(II:15)と云ってのけます。このようなオズモンドの生き方は、自由と独立の精神を持って、ヨーロッパで新しい生活を始めようとするイザベルの心情とは相容れないことが読者にはよく分かります。しかし、芸術性あふれるヨーロッパ文化に憧れているロマンチックな性格のイザベルには、旧世界の因襲を守ってかたくなに生きようとするオズモンドの本質を見抜くことができなかったのであります。

それ故に、ラルフが「オズモンドは趣味の権化」(II:71)のような人であると言って、オズモンドに批判的な態度を示すのですが、オズモンドに惹き付けられてしまったイザベルはラルフに次のように言って反論します。

「わたしはただ一つの野心——自由に愛情を貫き通したいという野心をもっています。(中略)あなたは、オズモンドが財産家ではないので、彼のことを不満に思っているの

ですか。それがわたしの気に入っているところなのです。幸運にも、わたしは十分お金があります。今日ほどそのことをありがたく感じたことはありません」(II:73)

イザベルはこう言って、財産や貴族の称号や社会的な名声のないオズモンドをかばい、彼こそ理想的な高潔な人物であると述べるのです。ついに、イザベルはラルフや周囲の人たちの反対を押し切って、オズモンドと結婚するのです。

結婚後、イザベルは物思いに耽る日々を過ごします。彼女はヨーロッパを駆け巡って、自分の可能性を探求しようとした当初の情熱を失っていきます。イタリアでの2人の結婚生活において、イザベルは、オズモンドが無礼な態度を示し、つねに彼女の心を悩ます尊大な人物であるということに認識します。たしかに、マダム・マールが2人の結婚のお膳立てをしたのでした。そして、この結婚が誤りであったとしても、イザベルは自分でその責任を取らなければならないと思いました。彼女はこの結婚はマダム・マールが仕組んだ財産目当ての策略だとは思いたくなかったのであります。自由と独立を目指すイザベルがそのように考えるのは当然のことでありましょう。彼女は2人の結婚を「自然と神意」(II:158)によるものだと自分に納得させようとしたのです。そうしなければ自分のアイデンティティを失うことになるからであります。

ところが、その頃、イザベルは意外な、異常な場面を目撃します。オズモンドが大きな椅子に身を沈め、マダム・マールは立ったままお互いに話し合いを続けているのです。その時、イザベルは2人の間に割り込むことができないような異様な雰囲気だけがただよっていることに気が付きました。一般に紳士が女性のお客を部屋に迎え入れる際には、紳士は椅子から立ち上がることが礼儀であります。しかし、イザベルは、オズモンドが座り、マールが立ったまま話している場面を目撃したのであります。その時に、イザベルは2人の間にただならぬ関係が潜んでいると直感しました。こういう場面を描写した後で、ジェイムズは2人の結婚生活に忍び寄る暗い陰を明らかにしていくのです。その描写がこの小説でもっとも重要な第42章の「認識の場」であります。

イザベルの内的独白の内容を考察しましょう。

イザベルは、マダム・マールから、オズモンドの娘パンジーがウォーバトン卿と結婚できるようにしてほしいと頼まれた時に、強い衝撃を受けます。この依頼はオズモンドとマダム・マールの密議によるものだと思ったからです。イザベルは、2人は親しい関係にあると認識します。さらに、オズモンドが「私は因襲そのものだ」と言った時に、イザベルは「因襲」の意味を伝統的な尊い崇高なものと解釈していました。しかし、彼女は、彼が無欲な孤高の紳士ではなく、世間体を気にするエゴイストにすぎなかったと実感します。彼女は、彼がもはや自由と独立の精神を尊重する自分とは相容れない俗物だと思ようになります。そして、いとこのラルフこそ清い精神を持った人物だと認識するのでした。

つまり、イザベルは、第42章の「認識の場」で、ヨーロッパの因襲の中に閉じ込めら

れていく自分の境遇を独白しているのであります。ここにおいて、ジェイムズは、アメリカの「無垢」とヨーロッパの「経験」という文化的衝撃の姿を見事に描き出していると言えます。

ラルフはイタリアに保養にきた時に、ウォーバトン卿と一緒にイザベルを訪ねます。その頃、パンジーは若い男性ロウジアと交際していました。しかし、マダム・マールはこの若い2人が結婚することを反対します。なぜならば、彼女がパンジーとウォーバトン卿との結婚を強く望んでいたからであります。一方、ラルフは、イザベルが微妙な立場に陥ることを心配して、パンジーとウォーバトン卿の結婚に反対します。

ラルフがイギリスに帰国後、イザベルは彼が危篤に陥ったという電報を受け取ります。彼女はオズモンドの反対を押し切ってまでラルフの臨終の床に駆けつけようとは思いませんでした。しかし、ジェミニ伯爵夫人から、パンジーはマダム・マールとオズモンドの間に生まれた子供であると聞いて、イザベルはラルフに会いに行く決心をします。その後、パンジーが入っている修道院を訪れた時に、イザベルはたまたまそこに居合わせたマダム・マールから、ラルフが父に頼んでイザベルに遺産を残すように取りはからったのだという事実を聞き出します。

その話を聞いて、すぐさまイザベルはガーデンコートに駆けつけ、ラルフの瀕死の床で、今まで一番信頼していたのはラルフだったのですと述べ、お互いにほんとうの気持ちを理解し合うのでした。

折しもガーデンコートにやってきたグッドウッドは、イザベルに再び接近し、2人で新しい生活に踏み出そうと言って結婚を迫るのですが、彼の執拗な求愛をしりぞけて、彼女はローマに向かうのでした。こうしてこの物語は終わるのであります。

イザベルはローマに戻ってどうするのでしょうか。再びオズモンドと一緒に生活を続けるつもりなののでしょうか。このことについて、私は『ヘンリー・ジェイムズ作品研究』の中で次のように述べました。

彼女がローマに戻ったのは、彼女の夫であるオズモンドに対して義務を果たすためではなく、自分自身に対して義務を果たすためなのである。自分自身に対して義務を果たすということは、神のもとにおける結婚という共同事業を成し遂げることである。

(103)

このように論述したのは、初版本でジェイムズが「結婚は女性が夫に従うことを意味した」(注1)と書いているところを、ニューヨークの改訂版で「結婚とは、女が実に大仰な誓いの言葉を述べながら一緒に祭壇の前に立った夫に貞節であることを意味した」(注2)と書きなおしていることを重視したからであります。

しかし、私はその後の研究書『ヘンリー・ジェイムズの国際小説研究——異文化の遭遇と

相剋』の中で次のような修正意見を述べました。

イザベルがローマに戻れば、確かに夫に貞節を尽して、苦悩を耐えしので生きていかなければならないであろう。聖書の言葉にもあるように。夫と和解しなければならぬであろう。しかし、(中略)イザベルにはもうひとつ残された道もあるのだ。夫と別れて結婚しないでもできる。聖書の教えでも、このような生き方は認められているのだ。(注3)このような生き方をしてこそ自由と独立の精神を保持することができるのではなからうか。マシーセンが述べているように、約束通りパンジーの世話をしてから、ローマを脱出することも可能である。(134)

今後、イザベルはヨーロッパにおいて苦しい試練を経て、自分の若さ、無垢、未経験による盲目的な状況を乗り越えて、新しい人間に生き返ることであろう。(136)

イザベルの直面する試練はなまやさしいものではないと思いつつも、私はこのような結びの言葉を書きました。小説はローマに戻るところで終わっていますから、この先は読者が自由に想像することができます。イザベルがローマに戻った場合に、イザベルとオズモンド、イザベルとマダム・マール、オズモンドとマダム・マール、イザベルとパンジー、パンジーとオズモンドやマダム・マールなどの人間が錯雑と絡み合い、イザベルはその複雑な人間関係をうまく解きほぐすのに苦悩するでしょう。この苦悩は、直接的には、彼女が財産目当ての結婚の計略に陥れられたことによって生じたものです。しかし、それは巨視的に見れば、自由を謳歌するアメリカ文化と伝統を重んずるヨーロッパ文化の衝撃によって惹き起こされたものと言えましょう。彼女は必ずや新旧両文化の衝撃を乗り越えて、当初に目指した通り、ヨーロッパ探求に向かって自分の道を邁進するでありましょう。

結局、この小説において、ジェイムズは、アメリカ文化とヨーロッパ文化の融合を目指したイザベルが新旧両文化の衝撃に直面し、苦悩する姿を描きたかったのだと思います。異文化衝撃の主題はジェイムズ文学の出発点であると言えましょう。

越境者作家ジェイムズは、その後、欧米文化の衝撃を主題とする小説を繰り返し執筆し、その問題点をめぐり出し『鳩の翼』や『黄金の盃』において、両文化融合の可能性を見出すのであります。『ある婦人の肖像』はその可能性を探り出すひとつの過程を示す作品だったと考えられます。

現在、異文化の衝撃は欧米だけではなく、世界の各国、地域、民族間で直面している問題であります。ジェイムズが1世紀以上も前に提起したこの問題は、今や全世界で見られる社会現象となっています。中近東の紛争はその典型的な例でありましょう。日本が関与している六カ国協議も国家間の政治的、文化的問題を調整する会議であります。

現在、国際社会は、グローバリゼーションが急速なスピードで進行しています。文学の分野では、国際社会のグローバル化にともなって、越境者の作家が多くなってきました。

ヘンリー・ジェイムズやジョーゼフ・コンラッドは 19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍した典型的なディアスポラ作家のさきがけであります。イギリスで活躍しているカズオ・イシグロやアメリカで活躍しているキョウコ・モリは日本生れのいわゆるディアスポラ作家であります。

この国際融合文化学会の上田邦義会長は、シェイクスピアの『リア王』を日本語に書きかえて、セルリアンタワー能楽堂で「華の座」公演として『能・リア王』を上演しました。この公演はまさにこの学会の趣旨に沿った異文化融合の試みであります。ジェイムズは小説という表現によって異文化の融合を試みた先覚者であり、上田会長は能という様式によって文化の融合を目指してみずから実践し、学会活動を続けています。

本日取り上げた越境者としてのジェイムズは、自分が生れた国であるアメリカのピューリタン精神を心に抱きながらも、ヨーロッパの伝統文化を理解しようという姿勢を保っていた作家であります。そして、彼はさまざまな苦難を乗り越えて、みずからヨーロッパで生活し、異文化融合の道を切り開いていったのであります。そういう訳で、ジェイムズは本学会で話題にする作家としてふさわしいと思った次第であります。会場の皆様、ご清聴を心から感謝します。

注：

- (1) (2) Henry James, *The Portrait of a Lady*, ed., Robert D. Bamberg (New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1975), Textual Appendix, 568-69 参照.
- (3) 聖書の「コリント人への第 1 の手紙」の第 7 章 10, 11 節に「妻は夫から離れるべきではありません。しかし、もし離れるようなことがあるなら、結婚しないでいるか、さもなければ夫と和解しなさい」と書かれている。

引用文献：

- James, Henry. *Hawthorne*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1966.
- _____. *The Portrait of a Lady*, vols. 1, 2. New York: Charles Scribner's Sons, 1936.
- 秋山正幸『ヘンリー・ジェイムズ作品研究』南雲堂 1981.
- 秋山正幸『ヘンリー・ジェイムズの国際小説研究——異文化の遭遇と相剋』南雲堂 1993.
- ランダムハウス英和大辞典 第 2 版 小学館 1994.